

力ある者

走り

続けよ

歌人大西民子



大西民子生誕100年記念



大西 民子 Tamiko Onishi

1924 - 1994

contents 目次

発刊にあたって

3

1924-1944

短歌との出会い

8

1944-1949

教員生活と結婚

12

1949-1972

大宮への移住

18

1972-1994

自分で選んだ道

26

大宮図書館学芸員が語る

28

民子という女性

歌人大西民子

素顔はこんな女性です

4

ほかにも詠んでいます

キエンとする歌

14

負けない気持ちや励ましの歌

20

民子のエッセイから

22

大西民子年表・大西民子歌集一覧

30

発刊にあたって

歌人・大西民子（1924-1994）は、岩手県盛岡市に生まれ、20代のときに夫とともに現在のさいたま市に移り住みました。その幻想的な作風の一方、民子自身は苦境に負けずに生き抜いた、意志の強い女性でした。

大西民子生誕 100 周年の節目を迎える 2024 年、より多くの人に彼女のことを知ってほしいという思いをこめて、本誌を刊行いたします。

歌人大西民子、 素顔はこんな女性です

大正・昭和・平成と
3つの時代を生きました

大西民子 (旧姓：菅野民子)

1924 (大正 13) 年 5 月 8 日 生まれ

1994 (平成 6) 年 1 月 5 日 没

さいたま市で長く
歌人として活動しました

住んだところ：

岩手県盛岡市→奈良県奈良市→岩手県釜石市
→埼玉県さいたま市 (大宮区、岩槻区)

当時の女性としては
めずらしく上の学校へ
進学しています

学歴：

- 1931 盛岡市立城南尋常小学校 (現・城南小学校) 入学
- 1937 岩手県立盛岡高等女学校 (現・盛岡第二高等学校) 入学
- 1941 奈良女子高等師範学校 (現・奈良女子大学) 入学

卒業後は、働きながら
歌人として活動しました

職歴：

- 1944 岩手県立釜石高等女学校 (現・釜石高等学校) に勤務
- 1949 埼玉県立文化会館で事務の仕事などを担当
- 1968 埼玉県立図書館 (浦和図書館) に勤務
- 1980 埼玉県立久喜図書館に勤務
- 1982 埼玉県立久喜図書館を退職、その後は短歌に専念

あだ名：民ちゃん、お民さん

趣味：読書、ピアノ、トランプ占い、お裁縫など

小さいころの夢：学校の先生、医者、ピアニスト

家族：

警察官のおとうさん・佐介

家族思いのおかあさん・カネ

優しいおねえさん・サト

甘えん坊の妹・佐代子

愛犬ローリエ

洋服は自分で
手作りしていました

好きな芸能人：原節子

好きなスポーツ：野球（巨人ファン）

好きなファッション：洋服は手作り派



石川啄木に
憧れていました

好きな動物：犬

好きな作家：石川啄木、谷崎潤一郎、オスカー・ワイルド、アンドレ・ジイドなど

好きな音楽：クラシック音楽（特にショパンの曲が好き）

A close-up photograph of several bright yellow flowers with five petals each, set against a blurred background of more yellow flowers and green foliage. The lighting is warm and soft, highlighting the texture of the petals.

きんもくせい
金木犀のはな

お う
にほふころ

A close-up photograph of several bright yellow flowers with five petals each, set against a blurred background of more flowers and green leaves. The image is overlaid with three white rectangular boxes containing Japanese text.

ははうえ
母上は

いかにおはすや

まなや
學び舎は

『むろ咲きの菜種の花の』

短歌との出会い

「先生、これ何？」

おおにし たみこ

大西民子（旧姓・菅野）は、一九二四（大正十三）年、

いわて けん もり おかし
岩手県盛岡市で生まれました。

じんじょう

尋常小学校三年生の時、民子は盛岡天満宮の石川啄木の歌碑を見て短歌に興味を持つようになり、盛岡高等女学校在学中のころには自分でも短歌を作るようになります。

成績優秀でみんなから将来を期待されていた民子でしたが、本人はあちこちをさまよい亡くなった啄木に憧れて、平凡に生きるより、波乱の人生を歩んでみたいと夢見ていました。そのために、自分もいつか故郷を飛び出そうと決意します。

歌人との出会い

学校の先生になるのが夢だった民子は、奈良女子高等師範学校への進学を希望し、一九四一（昭和十六）年、見事合格を果たします。



民子が見た盛岡天満宮の石川啄木歌碑
「病のごと 思郷のころ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも」

石川啄木の歌碑と出会う

好奇心旺盛な子どもだった民子は、盛岡天満宮の石碑に興味を持ち、先生に「これ何？」と質問しました。子供にどう説明すればいいのか先生は困った様子で、「これはね、石川啄木という変な名前のおじさんの歌なの。あなたがもう少し大きくなると分かるようになるわ」と話しました。

大きくなって啄木の歌集を読んで感銘を受けた民子は、そのうちに57577と数えながら、自分でも短歌を作るようになっていきました。



母上はいかにおはすや學び舎は金木犀のはなにほふころ 手作り歌集『むろ咲きの菜種の花の』より 一九四四年 一九歳
 奈良女子高等師範学校在学中、民子は学校の寮に入っていました。しっかり者の民子でしたが、当時はまだ十代の少女、家が恋しくなることもあったようです。秋、学校の金木犀が匂うころ、お母さんは今どうしているだろうかと思わず考えます。

当時の女性の進学率

女性の尋常小学校から高等女学校への進学率が約20%(1940年時点)だったのに対し、女子高等師範学校などのさらに上の学校に進学できた人は、戦前を通して1%もいなかったといます。民子は遠くの学校に行かせてもらえるだけの学費と、理解のある両親に恵まれた幸運な学生でした。



奈良女子高等師範学校にて
 1941-1944年頃撮影
 後列中央が民子

初期の手作り歌集等

民子は奈良にいたころ、手作りの作品集を複数作っています。この作品集には短歌のほか、詩や民子が描いたイラストも載っていて、可愛らしく装飾されています。家族への想い、学校での生活、激化する戦争など、当時の民子の想いが綴られています。



入学してしばらくしたころ、学校で短歌会が開かれ、近くに住む歌人・前川^{まえかわ}佐美雄^{さのみお}が先生として呼ばれました。前川との出会いで短歌の魅力に目覚めた民子は、歌さえあれば何もいらなと思うようになっていきました。ところが、戦争の影響で民子たちは四年間通うはずの

学校を半年早く九月で卒業し、岩手に帰らねばなりません。泣きながら別れを惜しむ民子に、前川は岩手にもいい歌人はいるということ、そして、いつか東京に行った時は木俣^{きまた}修^{おさむ}という歌人を訪ねるようにとアドバイスを送りました。



いのち
わが命ここに

いぎさだ
意義定まりつ



わがつまの

生きる^い限りは^{かぎ}

生き^い遂^とげむ^ん

教員生活と結婚

私の八月十五日

奈良女子高等師範学校を卒業後、岩手に帰った民子は、
釜石高等女学校の教員になりました。

あこがれの仕事に就いて、熱心に働いていた民子でしたが、製鉄所のあった釜石は戦時中に大きな被害を受けます。特に、一九四五（昭和二〇）年八月九日の攻撃のあと、学校にも遺体が収容され授業ができる環境ではなくなっていました。そこで、民子と同僚の先生二人は、生徒を安全な場所に避難させようと、約四〇km離れた遠野^{とんの}へ連れて行くことにしました。何とか全員無事に到着したその数日後、民子たちは八月十五日の終戦をむかえます。

「私たち、結婚する約束です」

民子は、勉強もできて多才な自分に自信を持っていたようです。若いころに書いていた、半自伝小説「赤い月見^{あかつきみ}」

釜石時代の教え子たちと



生徒とともに写った写真
1945年頃撮影
下段中央着物の女性が民子

教員だったのは、1944年9月から1949年2月まで（闘病期間も含む）と短い期間でしたが、埼玉に来てからも、しばしば教え子たちが民子を訪ねて来ており、慕われていた教員であったことが伺えます。

草」の中で、「自分の相手として足る男などこのK市（釜石）はおろか、一県（岩手）にはあり得ない」と考えていたと書いています。そんな彼女の心を射止めたのは、民子と同じく教員で、小説家を目指していた大西博でした。二人は意気投合し、一九四七（昭和二二）年に結婚します。

民子はこの文学好きな博を愛し、いつか芥川賞を取ってくれればと冗談交じりに励ましていました。結婚の翌年には男の子を授かりますが死産してしまい、さらに、自身も体調を崩し約半年間病気で苦しみました。

仕事に復帰した民子でしたが、我が子を亡くした心の傷を抱えて辛い日々を過ごしていました。そんなある日、書店で見つけた歌人・木俣修の歌集『冬暦』^{とうれき}を読み、民子は心を動かされました。多くの文学者がいる東京の近くに行ってもっと短歌の勉強をしたい、という民子の熱意に博も同意し、二人は教員を辞めて、埼玉^{さいたまけん}大宮市にある埼玉県立文化会館で働くことを決めます。そして、一九四九（昭和二四）年、釜石を旅立ちました。

めずらしかった恋愛結婚

50%以上の方がお見合いで結婚していた当時、民子と博は恋愛結婚で結ばれました。民子は結婚についての思い出として、交際していることを勤務先の校長から叱られたときに思わず、「私たち、結婚する約束です」と言ってしまったことが決め手になったと語っています。

民子の小説

結婚後、小説家を目指していた博に影響されたのか、民子も何作か小説を書いています。小説は民子自身のことを反映した自伝的な内容が多く、「赤い月見草」もその一つです。



わがつまの生くる限りは生き遂げむわが命ここに意義定まりつ 手作り歌集『回顧一年』より 一九四八年 二四歳
民子が結婚したばかりのころの想いを詠んだ歌です。わがつま（わたしの夫）が生きている限り生き遂げよう。私の命の価値はここに定まったのだ、と共に生きていく決意を表わしています。



バス降りて

十字路をよぎり

来る君よ

夕陽の中の

われに手あげて

『まぼろしの椅子』

結婚前、民子が博とデートしていた時のことを詠んだ歌です。生徒たちに見られてはいけないと、待ち合わせ場所で隠れて待っていた民子に対して、博は大胆にも手を振ってやってきました。

ほかにも詠んでいます
キユンとする歌

結婚式の時の光景でしょうか。家族に結婚を反対されていた民子は、白無垢を着ることができず、自分の持っていた中で一番いい着物を着て式を挙げました。それでも、喜びから思わず嬉し涙を流しました。

はれぎぬの 縫ひ美しき 新づまは

今宵あはれや ほゝゑみて泣く

『回顧一年』

ルージュもて 咄嗟に書きし 伝言の

短き文字を 今に忘れず

『無数の耳』

若いころのことを回想して詠んだ歌です。相手は誰だったのでしょうか。その時、鉛筆もペンもなかった民子は、その人への返事を咄嗟に口紅で書きました。自分の書いた短い返事の手紙を、民子は今でも忘れることができませんでした。



あくがれて待^まつ

夜^よもなし今^{いま}は

かたはらに

まぼろし
おく幻の

い す ひと
椅子一つ

『まぼろしの椅子』

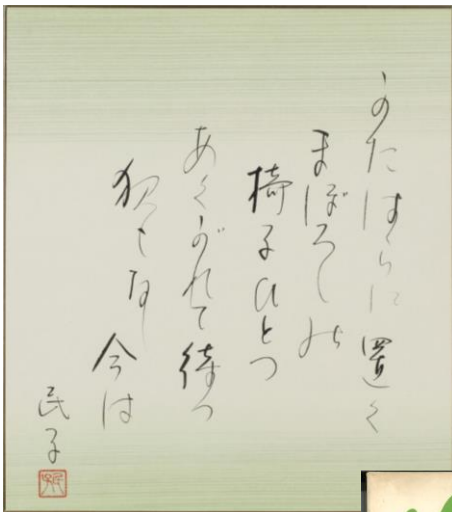
大宮への移住

幻の椅子

大宮に引越した民子は、木俣修に入門することができました。「朱扇しゆせん」そして「形成けいせい」という短歌グループに参加して成長していく民子に対し、博は小説家として芽が出ず、私生活は乱れがちになり、ついには別居状態になってしまいます。

一九五六（昭和三一）年、民子は最初の歌集『まぼろしの椅子いす』を刊行します。博の帰りを待つ日々を詠んだこの歌集は、大きな反響を呼びました。寂しさに耐える、辛い日々を支えたのは短歌の存在でした。また、生活のため働かなければいけなかった民子は、くじけて泣いてばかりはられませんでした。

再び一緒に暮らせるかもしれないという希望を支えに、約十年間博の帰りを待った民子でしたが、一九六四（昭和三九）年、二人は離婚しました。



自筆色紙「かたはらに置くまぼろしの椅子ひとつあくがれて待つ夜もなし今は」



最初の歌集『まぼろしの椅子』
新典書房
1956年刊行・初版



30代頃の民子
撮影年不明

絵本積むことも仕事の一つ

一九六八（昭和四三）年、民子は文化会館から埼玉県立図書館に異動します。文化会館が博物館（現・埼玉県立歴史と民俗の博物館）になることが決まった際、図書館で働きたいと自分から希望しました。もともと本好きだった民子は、新しい仕事にやりがいを感じていたようです。調べものの係や、子どもの本の担当などを任せられ、熱心に働いていました。

妹といふあいらしきもの

四四歳の時、民子は大宮市堀の内町に家を買います。この家で、民子は妹・佐代子と二人で暮らしていました。やや浪費癖があった民子に対して、妹の佐代子は節約上手なしっかり者で、忙しい姉の代わりに家事をしていました。肉親のほとんどを亡くしていた民子にとって、最後の家族である佐代子は精神的な支えでしたが、一九七二（昭和四七）年の六月、佐代子は心臓麻痺を起こし亡くなります。予期せぬ突然の別れに、民子はその死をなかなか受け入れることができませんでした。



かたはらにおく幻の椅子一つあくがれて待つ夜もなし今は『まぼろしの椅子』より 一九五五年 三十一歳
夫の帰は大宮に来てから、だんだん家に帰らなくなってしまいます。かたわらに座る夫を毎晩想い続けてきた民子でしたが、今となってはもうその帰りを待つことはない、自分に言い聞かせるように詠んでいます。

堀の内町の家で

引っ越しを繰り返してきた民子は、自分の家を購入したことで、落ち着いた暮らしを送ることができました。姉妹はそれぞれ自室を持っていましたが、民子は蔵書が多く、書庫を作ってもらったといいます。

「歌人が住んでいる」と近所で噂され、いつの間にか歌(音楽)の先生だと勘違いされてしまったそうです。子どもに音楽を教えてほしいという人が民子を訪ねてきて、驚いてしまったという話が残っています。



民子の妹・佐代子
母・カネと佐代子は、岩手を離れた後、埼玉県岩槻市の浄国寺に住んでいた

負けない気持ちや
励ましの歌

突き刺さる 言葉なりしが

心に突き刺さるような言葉を言われたが、鳥や魚が言ったことと同じようなものと思って相手にせず忘れよう。強く生きる民子の姿を感じる歌です。

鳥か魚の 言ひたることと なして忘れむ

『野分の章』

人は人と 突き放すまでに いくばくの

知人から長い愚痴を聞かされた民子は、「人は人」と言い、いつまでも悩まないようにとあえて突き放しました。いつもおだやかだったという民子の、きっぱりした一面を感じさせる歌です。

時間ありしや 雨降りてゐる

『野分の章』

屈するは 膝のみとして 立ち直る

長年働いてきた民子。その日々は楽しいことばかりでなく、辛いことや悔しいことも多くありました。若き日の民子は、曲げるのは膝だけで心までは屈しないと自分を鼓舞していました。

若き日ありき 勤めて長き

『風水』

滅^め多^たには

潰^{つぶ}れぬと人^{ひと}に 言^いひて来^きて

言^いひし言^{こと}葉^はに 励^{はげ}まされゆく

『花溢れるき』

誰かから心配してもらった時の出来事でしょうか。滅多にはつぶれないわと言ってみせた民子でしたが、まるで言霊の様に気持ちが前向きになったことに気が付きました。



民子のエッセイから

大宮について

「大宮は、埼玉のよその町々にくらべると、いかにも忙しい、動きのはげしい町である。決してそれが悪いというのではない。大宮では、明日着る服を買おうと思えば、どんな服でも市内のお店で買うことができるのである。わざわざ電車賃をかけて東京へ出かけてゆく必要のない便利な町なのである」

エッセイ「大宮びと 既製服」より 「おおみや」第26号掲載

「私に言わせてもらえば、大宮は馬の骨の町だ。人口二十何万かのうち、土着の人は四、五万しかいないのだとも聞く。(中略)馬の骨の住みやすい町なのは、昔中山道の宿場町として栄えた大宮にはよそ者を大事にする伝統があったのかも知れない」

エッセイ「大宮びと 馬の骨」より 「おおみや」第26号掲載

短歌と歌集

「歌集の出版がひきつづき盛んなようである。若い新人のはじめての歌集、大家、中堅といった作家の何冊目かの歌集、それらにまじって、中年以後になってようやく何十年間かの労作をまとめた第一歌集、というような本も多くなっているように思う。(中略)「いずれは歌集を出す」という希望をいだいて、少しずつ資金をため、歌を作りためてゆくことは、どんなに苦しくても、それだけ光りのある生活とはいえないだろうか。今のような世の中では、信念を持ち、希望を失わない生き方が一番強いのだと思う」

エッセイ「歌集と作家」より 『まぼろしは見えなかった』掲載

夫と私

「今から考えると昔見た夢のような話であるが、夫が家を出て行ったまま帰らなくなったのは昭和二十九年のことであった。(中略)そして昭和三十九年の六月のある日、夫は私の職場に訪ねてきた。二人で向き合ったとき、夫が最初に言った言葉は、「十年もたったのだから、正式に離婚してほしい」という申し入れであった。(中略)少し話し合ったが、夫の意志は固いようであった。何か急に離婚をしなければならない事情が起こっているのかも知れなかった。慰謝料など支払う気持ちは毛頭ない、と言う彼に、公務員をして暮らしの立っている私は、無理に慰謝料をもらう気持ちも起こらなかった。私は大西という彼の姓をそのままペンネームに使わせてもらうことだけを条件に、離婚に応ずることにした。わずか三十分ほどの話し合いであったが、私は冷静でありたいと思った」

エッセイ「白い靴」より『まぼろしは見えなかった』掲載

短歌の作り方の秘訣

「歌の作り方には人さまざまの方法があるだろう。私の場合は、来るか来ないか分からないお客を待つように、じっと机に向かって待つ。来る夜もあるし、来ない夜も多い。来た夜の喜びは、会いたい人が訪ねて来たように胸がときめく。そのかすかなよろこびに賭けて、三十年も歌を作り続けて来たのかと思うと、はかない思いもする」

エッセイ「うさぎの歌」より『まぼろしは見えなかった』掲載



ちから もの
力ある者

はし つづ
走り続けよ



とどこほ^おる

雲^{くも}のごときは

差^さし措^おきて

『光たばねて』

自分で選んだ道

「大西さん」と「菅野さん」

離婚後、旧姓に戻った民子でしたが、歌人として活動する時は「大西民子」の名前をペンネームとして使い続けていました。日中は仕事をしていたため、短歌に集中できるのは、夜の八時〜深夜一時くらいだったそうです。一方、職場では本名の「菅野民子」の名前で仕事をしていました。当時珍しかった女性管理職にもなり、部下たちの個性を大事にして仕事をしていたといえます。民子は、友人に「大西民子さんは華やかな目にも^あ遇い、少しはいい思いもしたけど、菅野民子さんは苦労ばかりでかわいそうだった」と話していました。

一九八二（昭和五七）年、体調が悪化した民子は、定年を待たずに県立図書館を早期退職します。その翌年には、長年教えを受けた木俣修が亡くなり、民子は木俣にかわって後輩を指導していくようになりました。

名誉ある短歌の賞を受賞

長年歌人として活躍してきた民子は、その功績から様々な賞をもらっています。

- ・1982（昭和57）年－『風水』にて「第16回^{ちょうくうしょう}遼空賞」受賞
※その年刊行された最も優れた歌集に送られる賞です
- ・1988（昭和63）年－「埼玉県文化功労者」として知事表彰される
- ・1992（平成 4）年－「紫綬^{しじゆ}褒章」受章
- ・1993（平成 5）年－「第4回大宮文化賞」受賞 など



第16回遼空賞授賞式
1982年撮影



紫綬褒章

力ある者走り続けよ

木俣亡きあと、約十年間続けてきた「形成」でしたが、ついに解散することになります。民子は、後輩たちの未来を考えて、歌人・持田勝穂と一緒^{もちだかつほ}に新しい短歌グループ「波濤」^{はとう}を結成することを決意しました。「波濤」創刊号は、一九九三（平成五）年十二月二五日に発行されましたが、その数日後の一九九四（平成六）年一月五日、民子は心筋梗塞^{しんきんこうそく}により自宅にて永眠しました。

民子は生前、エッセイ「挽歌^{ばんか}を書きつづけた歲月」の中で自分の人生をこのように語っていました。

「運命に翻弄^{ほんろう}されることを期待して故郷を去ったのも、母校の教師になることを避けて戦禍^{せんか}の街・釜石に職を求めたのも、若さのせいであつたらう。しかし今、そのことを後悔^{くわい}などしていない。ほかに私にふさわしいどんな生き方があつたらう。何度も分れ道はあつた。そのつど私は自分で選んで歩いて来た。結果として今ここにひとり^{すわ}で坐っているのだと納得する」



とどこほる雲のごときは差し措きて力ある者走り続けよ 『光たばねて』より 一九九三年 六九歳
この歌は、もともと「波濤」創刊号のために詠んだ歌です。「波濤」創刊号で、民子は滞る雲とは自分自身のことにはならないと書いています。力ある人々は、私のことなど放って走り続けていてほしいと励ましの気持ちを込めた一首です。

多くの人に慕われた 晩年の日々

妹が亡くなったあと、ひとり暮らしをしていた民子を、弟子たちは身の回りの世話などをして支えていました。家族のいないさびしさはありましたが、民子は多くの人々から慕われていました。



晩年の民子
1993年撮影

民子という女性

自分の意志で歩んだ女性

これまで、大西民子という女性の存在は、あまり知られてきませんでした。

小さいころから賢かった民子は、家族からも友達からも将来を期待されていました。さすらいの日々を送った石川啄木に憧れていたとはいえ、両親に愛され希望にあふれる毎日を過ごしていた民子は、まさか自分も啄木と同じく波乱の人生を辿ることになるとは思っていなかったでしょう。

その後、離婚など様々な困難に直面することになった民子でしたが、制約の多い時代の中で、彼女は進学の時も結婚の時も、自分の意志で未来を選択してきました。後年には「自分で選んだ道を、人にさしずされないで生きて来たのだから、別に後悔することはない」と語っています。

そんなつらい時も、民子は生活のために働かなければなりません。しかし、職場という別の環境があったからこそ、悲しみに潰れてしまうことがなかったともいえます。責任感の強かった民子は、どの職場でも熱心に働きました。

短歌とともに生きた

悲劇の妻というイメージが強い民子ですが、離婚して佐代子と暮らしたころは、幸せな日々を過ごしていました。ところが、佐代子は四〇歳の若さで急死してしまいました。民子は一九七二年から亡くなる一九九四年まで、ひとり大宮の自宅で過ごすことになりました。民子は、自分の人生を短歌に表現することで、心の傷をしだいに受け止めていきました。そんな彼女の生き方が分かるエピソードがあります。



一九八八年、縁のあった岩槻市浄国寺に、民子の「一本の木となりてあれゆさぶりて過ぎにしものを風と呼ぶべく」という歌が刻まれた歌碑が建立されました。その祝賀会で、知人から今自分は困難な状況にあると打ち明けられた民子は「大丈夫よ。風は必ず過ぎてゆくんだから」と言って励ましたといえます。どんな辛いことも、木のように根をしっかりと張って立っていれば、いつか必ず風のように通り過ぎていくと。

生誕百年をむかえて

図書館でも「小説は読むけど、短歌はよく分からない」「歌集を手に取ったことがない」という声を聞くと、少しでも大西民子とその作品について知ってもらうきっかけになればと思い、生誕百年を迎えた今年、冊子を作成いたしました。

この冊子をきっかけに、波乱の人生をその才能と強い心で生き抜いてきた大西民子という女性について、親しんでいただけたら嬉しいのです。

大西民子略年表

- 1924年 5月8日、岩手県盛岡市に生まれる
(大正13)
- 1937年 岩手県立盛岡高等女学校に入学
(昭和12) この頃から短歌を作り始め学校の校友誌に短歌を掲載する
- 1941年 奈良女子高等師範学校文科に入学
(昭和16) 在学中に歌人・前川佐美雄に歌を教わる
- 1944年 岩手県立釜石高等女学校の教員として赴任
(昭和19)
- 1947年 大西博と結婚
(昭和22)
- 1949年 大宮市に移住、埼玉県立文化会館で働く
(昭和24) 歌人・木俣修に入門する
- 1953年 木俣が「形成」を創刊し、民子も参加する
(昭和28) このころから夫と別居状態になる
- 1956年 第一歌集『まぼろしの椅子』を刊行
(昭和31)
- 1964年 大西博と協議離婚
(昭和39)
- 1968年 埼玉県立図書館(浦和図書館)に異動
(昭和43)
- 1972年 最後の家族であった妹の佐代子が死去(享年40)
(昭和47)
- 1980年 埼玉県立久喜図書館で勤務、館内奉仕部長に就任
(昭和55)
- 1982年 埼玉県立久喜図書館を退職
(昭和57) 『風水』で逍空賞を受賞する
- 1983年 師・木俣修が死去(享年76)
(昭和58) 吉野昌夫と共に「形成」の指導者的立場になる
- 1988年 埼玉県岩槻市の浄国寺に民子の歌碑が建立される
(昭和63)
- 1992年 紫綬褒章を受章
(平成4)
- 1993年 「形成」が解散し、短歌結社「波濤」を結成、
(平成5) 創刊号を刊行する
- 1994年 1月5日、自宅で心筋梗塞により死去(享年69)
(平成6) 岩槻市浄国寺に埋葬される
- 1996年 関係者より民子の原稿や蔵書など資料約1万点が
(平成8) 大宮市に寄贈される
- 2000年 民子を顕彰して、波濤短歌会が「大西民子賞」を、
(平成12) 大宮市が「現代短歌新人賞」(現在はさいたま市主催)を設立
大宮市氷川の杜文化館庭内に民子の歌碑が建立される
- 2009年 岩手県中津川沿い(上の橋緑地)に、
(平成21) 民子の歌碑が建立される
- 2019年 移転したさいたま市立大宮図書館で、民子をはじめとする郷土の文学者の特集した「文学資料コーナー」が作られる
(令和元) デジタルアーカイブ「おおみやデジタル文学館」にて民子の資料をインターネットで公開
- 2024年 大西民子生誕100周年をむかえる
(令和6)

大西民子歌集一覧

- 第一歌集『まぼろしの椅子』(新典書房、1956年)
- 第二歌集『不文の掟』(四季書房、1960年)
- 第三歌集『無数の耳』(短歌研究社、1966年)
- 第四歌集『花溢れみき』(短歌研究社、1971年)
- 第五歌集『雲の地図』(短歌研究社、1975年)
- 第六歌集『野分の章』(牧羊社、1978年)
- 第七歌集『風水』(沖積舎、1986年)
- 第八歌集『印度の果実』(短歌研究社、1986年)
- 第九歌集『風の曼陀羅』(短歌研究社、1991年)
- 遺稿集(第十歌集)『光たばねて』
(波濤短歌会編、短歌新聞社、1998年)



参考文献

- 『私の短歌入門』山本友一 / 編 有斐閣 1977年
- 『大西民子集—現代短歌入門自解 100歌選』大西民子 / 著 牧羊社 1986年
- 『大西民子の歌—現代歌人の世界4』沢口美美 / 著 雁書館 1992年
- 『青みさす雪のあけぼの—大西民子の歌と人生』原山喜亥 / 編 さきたま出版会 1995年
- 『回想の大西民子』北沢郁子 / 著 砂子屋書房 1997年
- 『評伝 大西民子』有本俱子 / 著 短歌新聞社 2000年
- 『まぼろしは見えなかった—大西民子随筆集』大西民子 / 著 さいたま市立大宮図書館 / 編 さいたま市教育委員会 2007年
- 『女学校と女生徒—教養・たしなみ・モダン文化』稲垣恭子 / 著 中央公論新社 2007年
- 『大西民子全歌集』大西民子 / 著 波濤短歌会 / 編 現代短歌社 2013年
- 『大西民子の足跡』原山喜亥 / 編著 沖積舎 2016年
- 「おおみや」第26号 大宮名品会 1970年
- 「波濤」1994年1月号(創刊号) 波濤短歌会事務局
- 「現代短歌」2014年2月号 現代短歌社
- 埼玉新聞 1969年12月15日「住宅考」大西民子 / 著
男女共同参画局ホームページ <https://www.gender.go.jp/index.html>

大
西
民
子



力ある者走り続けよ 歌人大西民子
大西民子生誕 100 年記念

2024 年 5 月 1 日発行

編集・発行：さいたま市立大宮図書館

〒 330-0843 埼玉県さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1

電話 048(643)3701

※各種のタイトルは、大西民子の短歌やエッセイの一文から取りました。

※掲載資料は、全てさいたま市立大宮図書館所蔵です。

※無断転載、複製を禁じます。

※作品の一部に、今日の人権感情に照らし不適切と思われる表現がありますが、原文のまま掲載しています。

※著作権には十分配慮していますが、お気づきの点がありましたらご連絡ください。



大西民子
生誕|| 100th

